- 1 派遣期日 令和5年11月7日(木)
2 派遣先 学校名 金ヶ崎町立金ヶ崎小学校
所在地 岩手県金ヶ崎町西根大谷120
http://www.town.kanegasaki.iwate.jp/sc_kanegasaki_sho/

3 研修内容

視察校は、令和4度より金ヶ崎町教育委員会の指定を受け、研究実践に取り組んでいる。本年度は研究2年目であり、その「学校公開研究会 プレ大会」に参加させていただいた。公開授業の参観と協議への参加、これまでの研究成果の報告を拝聴し、その取組と学んだ実践内容について、以下述べていきたい。

(1) 研究への取組

研修主題

自分の思いや考えを伝え合うことができる児童の育成
～「学びをつなぐ」授業づくりを通して～

視察校では、「相手意識をもって主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童を育成するための授業づくり」が行われている。研究を通して、「外国語で自分の思いや考えを伝えられる子」「相手の思いを理解し、相手の話を受け止めながら聞くことができる子」をめざす児童像として示している。

研究主題に迫るための手立ては以下のとおりである。

- 【手立て1】必然性のある言語活動の設定
- 【手立て2】自分の思いや考えを伝え合う活動の工夫

(2) 研究授業

ア第5学年 Unit7 Welcome to Japan. 【NEW HORIZON Elementary English Course5】
指導者 佐藤 俊也先生

- 【手立て1】ダニエル先生の弟に日本のことについてビデオレターを送る。
- 【手立て2】言語活動における中間指導での教師の視点を明確にする。

授業は、ELTが歌やチャンツの意味を確認しながら練習するところから始まった。児童は、意味を理解しながら歌うことで、既習表現を想起する児童がいたことが分かり、活動の価値を感じた。単元終末の言語活動(最終ゴール)を確認した後は、35分間、最終ゴールに向けた対話活動が続いた。Small Talkをもとに、Step Up Talk、Challengeと何度かペアの相手を変えながら、繰り返しペアトークを継続した。教師が、やり取りを一度で終わりにするのではなく、終わりの声がかかるまで何度も行うように助言することで、児童は対話を続けることができていた。中間指導(価値付け)では、意図的な指名でペアトークの発表があった。ペアトークを学級全体の前で行うことが習慣化されている様子が見られた。「さらに対話を続けるために」「分かりやすく伝えるために」などの視点で意見を共有し、最終ゴールに向けた表現の定着を図るとともに、話し手と聞き手を育てていくための発問、声かけがされていた。最後のペアトークが行われた際には、やり取りが5、6回交わされ、話された内容に合わせてさらに質問をしたり、相手に分かりやすく伝わるように説明を付け加えたりするなど、相手意識をもって対話する児童の姿が見られた。

イ第6学年 Unit6 Let's think about our food. 【NEW HORIZON Elementary English Course6】
指導者 吉田 朋先生

- 【手立て1】金小オーワングランプリを開催する。
- 【手立て2】言語活動における中間指導での教師の視点を明確にする。

地域で行われるイベントを視察校バージョンに置き換えて開催することで、オリジナルのメニューを紹介したい気持ちを掻き立てるゴールの設定となっていた。授業のはじめにグッド・バッドモデルの提示をすることで、児童は本時の目標とする姿を各自が意識しながら学習に臨んでいた。

その後、35分間のペア活動が行われ、スピーチの表現を工夫したり、構成を考えたりする学習が続いた。Small Talk や Challenge の回数を重ねる毎に、中間指導（価値付け）をし、表現を工夫しふくらませたり、順番を入れかえたりしてスピーチがレベルアップしていった。最後には自分のタブレットにスピーチを録画し、見返す時間が設定されており、1時間の学びの成長を自分自身で実感することができる振り返りの時間であった。

(3) 研究協議

協議の中心は、中間指導の進め方であった。やりとりをしながら表現を高め、英語に親しみをもてるようにするために、指導の視点を明確にして中間指導に望むことを共有した。意図的な指名をしたり、使わせたい表現を明確にしたりしながら指導することで、児童が必要とする表現の幅を広げることができるという。ペアトークを繰り返し設定することで、対話を続ける主体的な話し方が身に付いてきていたのも実際に見ることができた。金ケ崎町教育委員会主任指導主事の石亀 典子先生からの助言からは、「Final Goal の設定」「バックワードデザインによる単元設定」「評価方法」の大切が伝えられた。必然性のあるゴールが児童の思考判断表現を育て、資質・能力を向上させるということであった。定型にこだわらず、児童の自由な発言こそが、小学校の外国語活動・外国語科で大切にさせたい指導法の一つであると話があった。

4 感想

全国的にも先駆けて外国語指導を強化している金ケ崎町の取組を実際に肌で感じることもできたことで、指導法の工夫や手立ての方法、めざすべき児童の姿を具体的にイメージすることができた。

【コミュニケーションの素地づくり】

授業を参観して最も驚いたことは、児童のコミュニケーションの素地が整っていることである。対話を続けられるだけの素地があり、原稿や文字で記された表現や語句がない中で、フレーズを音声のみで覚え、自分自身の英語表現で対話を続けていた。インプットも大切であるが、「話す活動」をたくさん取り入れ、使わせることが定着につながることを実感した。また、中学校への即興性のある対話へのつながりを感じた。

【担任による外国語活動・外国語科授業】

視察校では、担任が外国語活動・外国語科の授業を行っていた。教師が英語を話す場面が多いわけではなく、児童の学びが進むようにコーディネートしていた。指導の視点を明確にもち、児童のつぶやきや疑問、困り感をつなぐ発問をすることで、児童一人一人が表現を習得していた。児童の英語の発話量は、指導者の英語の得意不得意と比例しないことを実感した。また、担任だからこそ引き出せる発言など、関係性による指導の良さが発揮されていた。

【学校全体による外国語活動・外国語科への取組】

毎週金曜日“English day”として英語の活動が取り入れられたり、校舎内に“Kane SHOW corner”として多くの掲示物があったりと、学校全体で意識して外国語指導に取り組んでいた。コミュニケーション能力は、外国語活動・外国語科の授業のみでなく、生活・各授業・環境などの様々な日常的な取組が絡み合い、楽しみながら使おうとする環境の中で向上していくことがわかった。

先進的な取組から学んだことを指導に生かせるよう、さらに研修に努めていきたい。また、研修の機会をいただいたことに感謝し、これからの教育活動に生かしていきたい。